

---

# 空に浮かんだ優しい人魚

村上 悟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空に浮かんだ優しい人魚

### 【NZコード】

NZ515V

### 【作者名】

村上 悟

### 【あらすじ】

小学4年生のセイとミユウは、池の畔で空飛ぶ魚と出会った。

戸惑う一人に、画家のボッチはそれがホウボウであることを教えてくれた。

空飛ぶホウボウにセイがレンと名付けると、それは急に人間の言葉を話し出し、こんなことをお願いしてくれる。

「一緒に呪いを解いて欲しいの」

空飛ぶ魚と三人の優しい人間の、心温まる物語。

## セイとミユウが池の畔

> i 2 7 1 9 2 — 2 8 8 4 <

空は蒼い。

それは、光を反射した分子の青ではなく、ただ純粹に脳髄の主觀  
フィルターを通した上での蒼だった。

プリズムは放射状に太陽から地面へと降り注ぎ、しかしそれは単  
純な直線ではなくその歪みを許容した上で到達となつた。つまり  
は、光は歪む。それは自然の摂理ではなく、やはり心の岐路に充て  
た人間という事象を通した上で優しい結末なのだつた。

朱から蒼、その光は葉脈の筋を通るに至つて翠の線を帯びていた。  
二重三重に濾し取られた光の甘露を、矢中世依人は浴びていた。翠  
の中の蒼に糸を垂らし、広がる波紋。

「ああ、釣れないな」

「釣れないね、セイ君」

矢中世依人のことを高梨美優たかなし  
みゆうはセイと呼んだ。小さい頃からの呼び慣れた名前だ。

「ミユウ、お前ちょっと代わってくれないか」

「どうしたの」

「ん、トイレ」

「もう」

世依人は美優のことをミユウと呼ぶ。そして彼女は釣り竿を受け  
取つて顔を俯かせた。かすかにジッパーを下ろす音、その後に地面  
に零が反射する跳音が鳴る。水面は至つて平和で、その面手を眺め  
ているだけで眠くなつてくる。美優は手を口に当てて一頃り空気を  
吸い込んだ。その反作用で涙が眼に溜まつても、それを拭うことを

しなかつた。瞼を瞬かせれば自然に落ちていくものだから。

再びジッパーを上げる音がする。世依人はほどなく美優の隣に腰を下ろした。空気は澄み、暑さにも関わらず心地良い風が吹いているのに、匂いだけが鼻につく。

「セイ君、もう少し離れてしてくれても良かつたと思つよ」

世依人は頭を搔いて弁解する。

「いや、何か目が離せなくてよ」

美優が世依人を睨みつける。しかしそれは嫌悪でなく親しみを込めた嫌みであつた。

「ん、次からは気をつけるよ」

根負けした世依人に、美優が笑いかける。一人は言葉を交わすことなく、釣り竿の先を見つめた。上等とは言えない、手作りの竿だ。竹を持ちやすい重さになるまで削り、その先に凧糸をくくりつけていた。当然のことながら糸の先端には釣り針が付けられており、小エビを針に沿つて円形に突き刺してあつた。その釣り針はと言えば、世依人の祖父の持ち物だった。

今、世依人の頭の中には若干の不安がある。それは釣れるか釣れないかというよりも、あの厳格な祖父にこの悪行がばれ、きつい叱りを受けるのではないかというその一点であつた。

それとは異なり、美優は穏やかな気持ちで釣り針が水面に揺れるのを見ていた。摂氏三十六度にならうかというこの灼熱の中、この森のこの池の畔には涼しげな風が流れている。陽光を葉が受け、柔らかくほぐした後に地面がじっくりと咀嚼してくれている。熱は表にまで浮き上がってくることはなく、水面を撫でる空気の流れが適度な涼感を与えてくれさえしていた。

ここには鯉や鯰がいると聞いていたのだが、一向にそのような影は見えなかつた。世依人はそれを苦々しいとは思わない。彼はそもそもここに糧を求めてきたのではなかつた。ただ安らぎと停止した時間を眺めていられればそれで良かつたのだ。美優もその点では似たようなものだつた。彼女は環境をこそ願つた。自らが漣を立てる

ことなく、いつもの自分でいられるその隣こそが求めるものであった。

二人の願いを実現するのに、この場所ほど良い所はなかつた。何も遮ることなく、自分というものに没頭することができた。それにここはコントラストが非常に鮮やかだ。空と水面の蒼に挟まれて、木々の翠が視線に奥行きを与えてくれる。世依人はその木々の流れを追つていきながら、ある一点で目を止めた。

「ミコウ、あれ、いつからいた」

あれ、と指したのは画架を掲げ、水面に視線を向けている男性のことだった。

美優はその指先を凝視し、しばらく考えた後に首を横に振つた。  
「ううん、知らないよ。いつからいたんだろ？」

彼らが没頭しそぎていたのか、それともその男に存在感が無かつたのか。世依人は少々の間、その男を観察した。染めたとは思えないほど鮮やかな赤色の頭髪は短く刈つてあつた。半袖のティーシャツから覗く上腕筋は遠目から見て筋肉質だと分かるほどに鍛えてあつた。血のように赤いティーシャツとジーンズの蒼がその存在を浮き上がりせる。これほどまでに異様な光景であるのに、気が付かなかつたなどあるだろうか。世依人は自分の記憶を反芻してみるが、やはりそこに彼の姿はなかつた。

見た目だけで判断すれば、怪しい人物と言える。しかし、世依人は最終的にそれを無視することにした。男は画架に向かつて集中しているようで、こちらを気にする風でもない。それに表情は常ににこやかで、絵を描くことを楽しんでいるのが良く分かつたからだ。

「ま、大丈夫だろ」

「そうだね。何を描いてるのかな」

「あまり関わるなよ」

好奇心を覗かせる美優を、世依人は制した。知らない人間には関わらないに越したことはない。その意図が理解できたのか、美優もそれ以上、男について話題に出すことはなかつた。

一人の座るレジャーシートに、美優のポシェットが置かれている。桃色の肩から掛けるタイプのもので、留め金の部分に白いリボンが蝶々結びしてある。全体にフリルが施してあり、一見して女兒が好みそうな色形をしている。美優はそれを手に取り、バックルを開けた。その入口はファスナーで防護しており、中身が落ちないようになっていた。

さらにそのファスナーを開き、中から「そこそこと探し物をする。世依人が覗いたそこにはティッシュやハンカチ、ウォレットなどの実用物、何をするためかノートと小さなペンシルも入っていた。それらを横に退けて、取り出した小さな小袋を開いていた。表面は桃色がベースになっており、そこに橙のアクセントが加わっている。その配色はお世辞にも良いものとは言えなかつたが、世依人は美優の趣味嗜好について熟知しているため、口を挟むことはなかつた。

「はい、セイ君」

ガムベースに似たペレット状の菓子を世依人に渡す。色は朱だ。彼はすぐに思い至る。橙と桃色を混色すると朱色に変化する。つまりこの物質が何を表現しているかだ。小袋にはこう書いてあつた。  
『ねり梅みかん味』と。

世依人は望むと望まぬとに関わらず、その物体の示す意味について考えざるを得なかつた。それは「梅」であるにも関わらず「蜜柑味」を標榜している。確かにお互いが酸味という共通項で括られているとはい、本来その二つは出会うべきではない者共だ。それらをあえて組み合わせるということは果たして勝算があつてのことだろうか。それとも奇を衒い、一時期の話題を提供するためだけが故に、もしくは菓子会社としての新たな一步を踏み出すための踏み台としての役割を果たしているのだろうか。一つだけ理解できるのは「味が想像できない」という最も想像したくない結末であつた。

美優はいつまでも菓子に手を出そうとしない世依人に苛立ちを隠さなかつた。空中でゆらゆらと行きつ戻りつを繰り返している彼の右手に自身の手を添え、そつと掌を上に向けた。その汗ばんだ掌に

禍々しい朱を持つペレット状の菓子を乗せる。そうした上で世依人の顔を覗き込み、にこやかに笑つた。嘲笑ではない、墮天を誘う悪魔の笑みでもない、ただ純粹に彼の喜ぶ表情を誘い出すための優しい微笑みだった。しかしそれがそのままの意図を持って世依人に伝わつたかというと、それは彼の背筋をひたすら凍らせるだけのものだったが。

「食べて」

邪氣のない透き通つた面と声で美優は誘う。断るだけの勇気を世依人は持つていなかつた。名家である矢中家の次男として生まれ、厳しい躰と英才教育、さらには三年ほど前からやつてている剣道の精神をもつとしても、逆らえない迫力というものがあつた。何にしろ押してくるものに対しても力を利用したり、力で跳ね退けたりできるものだが、包み込むように逃げ場を無くされてはどうしようもないのだ。

つまりは、彼は美優に甘かつた。ただその一言に尽きる。  
「わ、分かつたよ」

世依人は諦めて菓子を口に含む。想像して欲しい。梅の酸味をベースにし、そこに練り込まれた蜜柑の風味を。世依人の口内は得も言われぬ感触で溢れた。不味かつたら、美優の意識を逸らしてどこかに吐き出そう。そうとまで考えた。

だが、世依人は噛み続けた。不思議なことに、噛み進めれば噛み進めるほどに深い味わいをもたらしてくれる。梅の塩分が総合的な酸味を和らげ、蜜柑の風味を押し上げてくれるような爽やかな清涼感が広がっていく。ガムベースにも似たソフトキャンディが段々と形を崩していくことを勿体ないとまで思つてしまつ。ゆっくりと味わい、それを反芻し、口腔内に残つた香りが消え去るまで、世依人はねり梅みかん味を楽しんだ。最後に一言声を発する。

「美味しい」  
「でしょう?」

美優が自慢げに胸を張る。その可愛らしい姿に思わず笑みを漏ら

す。世依人は言葉を続けた。

「ああ、美味しいな。本当にミューの持つてくる菓子はいつも変なのに美味しいんだものな」

「変なのに、は余計だよ。わたしは美味しいものしか食べない主義なんだもの」

菓子をきっかけに、話しが弾んでいく。美優は自宅に同居する祖母のことを楽しそうに話し始めた。美優の祖母は昔ながらの人物で、宗教的な教えを日常的に解釈していた。そこには古代日本に息づくアニミズムが見え隠れしている。

アニミズムとはこの世界の山川草木全てに神が宿り、その意志が人々や地域の環境に影響を及ぼしているという考え方だ。いわゆる八百万の神、土地神、道祖神などはこのカテゴリーに分類される。アニミズムの考え方は伝來した仏教やキリスト教さえも元々の純粹宗教から土着の神道へ取り込んでしまった。仏教が小乗ではなく大乗となり、さらには浄土教に代表される暮らしに溶け込む無味無臭の宗派と化したのも、キリスト教が聖書を読まない人間、神を読まない人間にも雰囲気によって理解され意識されているのもその影響が少くない。

この項ではそれが悪いのだというのではない。日本人はそれを好として積極的に取り込んできた。つまり日本人という希有な人種は日常の見えない部分に、自らの中とその隣に自然に神を宿す人たちなのだ。

「おばあちゃんはね、この池にも神様が住んでいてわたしたちを見てくれているんだって言うの。どの神様も本当は優しくて、特に子供たちが溺れないように怪我をしないようになって見てくれるんだけど、もし悪いことをしたら罰を与えるんだって。たまに溺れたりする子はそつやつて神様を大事にせずに悪いことをした子なんだって」

美優は実に真剣に祖母の教えを話す。世依人はその一つ一つに頷きながら、これは子供を諭すための教訓話だと感じていた。夜中ま

で起きているとお化けが来るよ、というのと大して変わらない。だが、それが悪いことだとは世依人も思わない。信じていさえすればそれが迷信であれ子供騙しであれ、事故からの回避を教えてくれる効果があるのだから。

そう言われて改めて池の深い蒼を眺めると、水面を撫でる優しい風に神の息吹を感じないではない。風はそのままクルリと空中を一回りし、美優の髪を撫でた。耳元まで隠れる長さの髪をこめかみの高さで両側ともゴムにより縛っている。そのぴょこんと跳ねた兎の耳にも似た髪型は、美優の天真爛漫な可愛らしさをより際立たせていた。

「風が気持ちいいね、セイ君」

「そうだな、ミユウ」

「風の中にも神様はいるのかな」

「いるさ。おばあちゃんがそう言つたんだろ」

美優は世依人の返事に満足して強く頷いた。美優はそれに心を良くしたのか、祖母についての逸話をいくつか話してくれる。曰く、おはじきなどの遊びを教えてくれること。妖怪とか、神様について詳しいということ。火傷をした時にはアロエの肉がよく効くのだとか、熱が出たら喉に葱を巻くと良いのだとか。夜中に寝苦しくて何度も寝返りを打つてしまうのは妖怪・枕返しがそうさせているのだとか、夜中に道を歩いていると急に前に進めなくなるのは妖怪・塗り壁のせいだとか。

美優が最も興味深く聞いたのは妖精についての話しだった。ブランニーという妖精はいたずら好きで困ったものだが、贈り物をすると喜んで手助けをしてくれるのだとか、ケットンシーは猫の王様で二本脚で立ち、人の言葉を話すのだとか、妖精というものは元々神様だったのだが人々が信仰心を無くしてしまったために体が小さくなってしまったのだとか。美優には想像も付かないことをたくさん話してくれた。

世依人も美優が話す祖母の言葉を快く聞いていた。実際に何度も

自宅の隣にある高梨家に遊びに行き、話を聞いている。美優が何度もせがむのを嫌がりもせず付き合つてくれる祖母のことを、世依人も好ましく思つてゐる。

負けじと世依人も自慢話を始めた。曰く彼の兄は文武両道で何でもできる人間だった。四歳上の兄である武人は学業でも優秀であり、世依人と同じく剣道も習い、さらに空手も上達している。彼にとつては自慢の兄であり、目標、憧れだった。矢中家を継ぐのに、こんなに適した人間を世依人は知らなかつた。

そもそも矢中家はこの久留市南梅町一帯の土地を持つており、その上で派生した事業によつて繁栄していた。その資産規模は一介の町地主にしては巨大で、陰では良からぬ噂が出回つてゐる。しかしながらそれでも彼らが尊敬を集めるのは町民に対する優しさを忘れないからであり、いくら要請があつても政治には関わらず、町に住み、町のために暮らしてゐた。そういう意味では彼らは町の守り神のようなものだつた。

そして実際には、黒い噂に紐付く事実などはどこにもない。世依人や武人が厳しく育てられ、かつ文武も両道にできるようになれと鍛えられているのは、噂に負けない体と心を手に入れるためだつた。生まれながらに恵まれた彼らは、それなりに優秀でなければならぬ義務が課せられているのだ。

「でさ、これ見てくれよ」

世依人は右腕を立てて美優に見せる。半袖のシャツから伸びる腕は小学四年生にしては十分に筋肉質だつた。そしてよく日焼けし、褐色というよりも焦げ茶になつてしまつた手首にはリストバンドがつけられていた。

「カッコいいだろ、これ、兄ちゃんからもらつたんだ」

世依人は黒をベースに赤いラインの入つたそれを愛おしそうに撫でる。美優もそんな世依人を優しい眼差しで見つめていた。

「うん、引き締まつて見えるね、セイ君」

美優の感想に世依人は頬をわずかに染めて照れた。そして、それ

を押し隠すように立ち上がった。

「あーあ、俺もこれつけて早く空手を習いたいぜ」

そのまま見よう見ま似的で空手の型を披露する。が、彼は忘れていたのだ。

「セイ君、釣竿」

美優の指摘で彼は初めて自分が釣竿を手放していたことに気付いた。慌てて地面に這い蹲り、釣竿に手を伸ばす。美優も彼と行動を同じくして竿に手を伸ばしていた。辿り着いたのは同時、その柄の端にようやく一人の手が届く。

「やつた」

「捕まえた」

それぞれがそれぞれの感想を漏らす。そうやって二人手を重ねたまま釣竿を引き上げようとしたその時だつた。

初めに気づいたのは美優だった。首を傾げ、世依人の顔を覗きこむ。

「ねえ、セイ君」

「なんだよ、ミユウ」

「この竿、震えてるよ」

言われて世依人が竿の先を見ると、確かに上下に揺れていた。世依人は美優に対し応える間も無く、竿を引っ張り上げた。鯉にしては意外に重い気がする。それに、やけに抵抗が少ない。そんなことを世依人は思つた。

水面に波紋が広がり、それは段々と泡立つて波を作れる。蒼は白を混ぜ、殊更に無色を強調した。彼らが握っている一本の命綱に繋がるこの糸は、一つの出会いを演出していた。

美優もようやくその意味を理解し、世依人と一緒になつて引っ張り上げる。次第に現れてくる魚影に、彼らは驚きの声を押さえようとはしなかつた。

それは、紅かつたのだ。

> 27360 — 2884 <

その魚は、鯉でも鰐でもなかつた。

全体的な容姿を見れば、それは「赤い」としか答えようがなかつた。それ以外にも特徴を表す言葉はある。なにより魚体が赤かつた。それに、四角いのだ。一見すれば箱河豚のそれを思わせるが、色彩の朱が断定を思い留まらせていた。胸鰓に当たる部分には両翼に似た翠の翼が宙を舞うように羽ばたかされ、いつそのこと空気を摑むその光景は滑稽でもあつた。

見ればそれが鯉でも、鰐でも、それ以外の彼らの記憶にある魚のどれとも異なつてゐるのは良く分かつていて。だが、世依人は蒼い光線の中に光るクリスマスカラーの魚影に驚くよりも先に感心してしまつっていた。それはまさしく奇妙と言うほか無かつた。翠の葉陰から差し込む光に照らされて、再び魚は跳ねた。跳ねて、跳ねてはねて。

一度二度、そして魚影は空中で静止した。

世依人と美優は、お互いに顔を見合わせていた。合わせ鏡のように見合わせ、その視線を魚の方に泳がせて。それでもいつまでも魚は宙を泳いでいた。

「セイ君」

「ミコウ」

一人は名前を呼び合つので精一杯だつた。美優に到つては汗ばむほどの蒸し暑さの中で体を震わせていた。世依人も、その奇妙な姿と異様な立ち居振る舞いに困惑し、目が離せずにいた。彼はそこに何かの意図を感じようとした。物事が正常に運ばない場合は、往々にしてその裏に隠された理由があるものだ。例えば誰かの利権、例

えば摂理の変異、例えば条理からの逸脱。どれもすぐには理解できなくても、やがてそうであつたと納得できるものでなければならなかつた。そして、それらのことは話をつけようと思えばどのようにでも理由付けの可能な事柄なのだつた。

世依人は怯える美優を背中にいつたん隠し、魚に害があるのかどうかを確かめようとした。未だ針を口に刺したままの魚は、朱い唇から僅かの体液を流していた。それが不思議と紅く見えなかつたのは氣のせいだろうか。ともかくも、まずは相手を刺激しないようにさり気なく歩み寄り、手を差し伸べる。

「セイ君、気をつけてね」

世依人は慎重に頷く。今のところ、魚が動く気配はなかつた。額に汗が流れる。それがほんの少し目に入り、世依人はかぶりを振つた。その刺激に反応してか、魚が身じろぎをした。あ、と思つた瞬間には魚はすでに空高く舞い上がり、その勢いで唇の針を引き千切つっていた。肉片を残して魚は空を左右にたゆたつている。それを呆然とした眼差しで見つめながら、世依人は両手を空に伸ばした。

背中の美優がティーシャツをしっかりと握つてきていた。その力強さは裏腹に恐怖の度合いを示していた。これ以上の関わりを拒絶する心の動きが表れていた。彼女の気持ちを思うと、世依人はそれ以上踏み込むことができないでいた。

「あれは、ホウボウですね」

膠着状態にあつた二人に声をかけたものがあつた。赤く短い髪、シャツから覗く膨らみからでも分かる筋肉質な体、血涙が滲んだかのように毒々しい原色の赤を主張するティーシャツ。木製のバングルが腕にはめられていて、一見するとシャーマンか何かだと勘違いしてしまう。放射状に広がる連続した輪をモチーフにしたネックレスがその思いをさらに加速させていた。

いきなり現れたその人物に、世依人は胡散臭さしか感じなかつた。魚からと、その人物からと、彼は一つの異形から美優を守らなければならなかつた。

少しづつ後じさりながら、世依人はその人物を問いただす。

「お前は、さつきまで絵を描いてた奴だろ」

彼は臆することなく頷いた。その仕種があまりに落ち着いていたため、世依人は逆に違和感のよつなものを感じていた。

「何しに来たんだ。俺たちに何をする気だ」

重ねられる質問に、彼は……仮に画家と名付けておこう……画家は口の端を歪めて苦笑した。

「君たちに危害を加える気はありません。特別な意図もありません。僕の格好が予期しない影響を与えたのでしたら先に謝つておきましょう。すいませんでした」

素直に謝罪されて、世依人はたじろいだ。代わりに、美優が今まで一言も発さずに世依人の後ろで観察をしていたが、段々と姿を現してきている。本当に一步一步、最初は肩口から画家の顔を覗いては隠れ、覗いては隠れとしていたが、それから先は覗いている時間が長くなり、画家の謝罪をきっかけにして世依人の隣に佇んでいた。画家の赤い頭をじっと見つめながら、この人は本当に良い人なのだろうかと観察しているようでもあった。

「あの……この魚……」

ようやく美優が声を出した。遠慮がちではあつたが、積極的にコミュニケーションを取ろうとしているようだ。可愛らしい行動に画家が微笑む。自分が他人に与える影響をよく分かつていて、彼は近付くことなく空を指差した。

「あそこにいる魚ですが、ホウボウと呼ばれています。青緑の丸い胸鰓が大きな特徴です。全般的に赤く、四角い体つきをしています。胸鰓はもちろん翼ではなく泳ぐときに使います。滑空するように泳ぐことから空を飛ぶような、とも言えますが……実際に飛ぶことはありません。また、胸鰓の付根には左右に三本ずつの脚があり、これを交互に動かして海底を歩くこともできます。この脚には味蕾があり、味を感じることができます。さらに言つと、海水ですか生きられませんので、なぜ淡水である池に潜んでいたかは謎です」

一気に捲くし立てる画家は、濶みなく、一言をえどもることなく流暢に語った。まるで俳優が台詞を喋るかのようだった。実に綺麗であったが故に、反対に怖さを感じる。それを感じてか、空に浮かぶホウボウが「グワグワ」と鳴いた。

旋回し、ゆつくりと地面に近くなつていぐ。底に降りることはなく、彼らの目線上にホバリングしていた。ゆらゆらと上トに揺れるホウボウは、風鈴か提灯のように思えた。

「ふむ」

画家は顎を一撫でし、ホウボウに手を伸ばす。魚は怯えることも暴れることもなくすんなりと手に納まつた。世依人はそれを見て、画家に近付く。必然的に美優も一緒に歩むことになった。彼らがおずおずと擦り寄つてくる間に、画家はホウボウの体を仔細に眺めている。その目は先程までの優しい笑みを齧め、ただ真剣で好奇心に満ちた鋭い視線だつた。

「おっさん、その魚、大丈夫なのか」

おっさん呼ばわりされた画家は、ほんの少しだけ頬を膨らませる。その仕種がおかしかつたのか、美優が口に手を当てて隠し、その陰で微笑んだ。暑さは好奇心の前で平面的な意味合いしか持たない。つまりは数値だけのものになり、感覚的には背筋に流れる寒氣によつて冷え冷えとしていた。

「おじさん、怖くないの」

美優が世依人から一步離れて、画家に近付く。画家はそんな彼女のために腰を落とし、視線を合わせて語りかけた。

「お嬢さん、この世で怖いのは『知らないこと』です。だから、僕は未知のものに出会うと観察するんですよ。あなたも観察して御覧なさい。何も怖くないことが分かりますから」

美優は言われた通りにじつくりと眺める。前後左右から、または上から下から。その間ホウボウは大人しくしており、身動き一つしなかつた。ただ、鰓だけがパクパクと空気を取り込んでいた。彼は水中からではなく、空气中から酸素を取り入れることができるように

だつた。

守るべき存在である美優が踏み出したことで、世依人の緊張も和らいだようだつた。彼はホウボウにも画家にも興味を惹かれていた。

「なあ、おっさん。この魚、何なんだろうな」

画家はまた少し首を捻つて応えた。

「今の所は、さあ、としか言いようがありませんね。どうですか、この近くに僕のアトリエがあるんですが、そこで少し話しませんか」画家の提案に、世依人は尻込みした。まだ会つて数分の男だ。奇しくも世依人は誘拐されるに値する主実の持ち主でもある。人一倍慎重になるのは当然だし、実際に被害にもあつたことがあるので怖いのだ。

だが、美優はそうではなかつた。彼女はすぐに頷き、画家の隣に歩を寄せる。それが世依人には少し悔しかつた。彼女を（一人の関係は嫉妬を催す間柄ではなかつたが）獲られた気になつてしまつたのだ。

「待てよ、俺も行くよ」

世依人がそれに続く。

「では、案内しますよ。安心してください。僕に子供を誘拐する勇気なんてありませんから」

そう言つて画家は笑う。まるで見透かされたようで、世依人は頬が熱くなるのを感じていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0515v/>

---

空に浮かんだ優しい人魚

2011年7月26日03時16分発行